

何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、
互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。
自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。

ピリピ2章3～4節

当法人が運営する7つのグループホームには、20代前半から70代前半までと、幅広い世代の方が共に暮らしている。まさしく1つの社会といえよう。だからこそ、入居者には今までの生き方が問われることになる。

ある入居者は幼少期に親から放任されたために、家庭で学ぶべき社会常識が身についていない。それが障碍以上にホームでの生活を難しくしている。

その方は、進行性の病気により身体機能の低下が見られる中で、過度の肥満や糖尿病のリスクを抱えていた。ホームのリーダーたちも懸命に心を配るのだが、どうしても本人に自覚がない。大量の間食を止められない。それをごまかす為に上手に嘘をつく。医師からの体重管理の勧めにも耳を傾けることが難しい。次第に他の仲間や職員との関係にも距離が生まれて行った。

さらには、もっと自由に暮らしたい、別のグループホームに移りたいと外部の支援員まで巻き込んで周囲を翻弄した挙句、最後は「ここにいたい」と涙ながらに訴えた。

そんなある日、一人のクリスチャン入居者が礼拝後に、自らの姿勢を省みた。自分のことにも関わらず真剣にダイエットに取り組まず、ごまかして周りに嘘をつくその方が許せなかった。だから裁いていた、と。そして本人に直接謝罪し、嘘をつかなくていい、一緒にダイエットの為に運動に取り組もうと、優しく語りかけたのだ。その言葉は氷のように頑なであったその方の心を溶かし、他の仲間や職員との関係までも改善された。

これまで誰にも深く向き合われることのなかった自分自身の課題に、真正面から寄り添ってくれる友を得た瞬間であったのだと思う。

今回の出来事を通して、「尊厳を大切にする」とは、単に障碍を理由にすべてを受け入れることではない。その人の本質に向き合い、ときに悔い改めを促しながら、共に歩もうとする姿勢そのものであると、改めて教えられた。

2026年5月 恵日

特定非営利活動法人ハートフルトボス理事長 坪倉 正史